

5/1/2011

見ずに信じる人は幸いだ ヨハネ 20:24-29

イエスが甦られた日の夜、何人かの弟子達が部屋に鍵をかけ、官憲の目を逃れてひっそりと暮らしていました。イエスと同じように逮捕され、牢獄にぶち込まれるのではないかと恐れたからです。

そこにイエスが突然現れます。そして驚く弟子達に語りかけます。「平安があなたがたにあるように。」

その時トマスという名の弟子はいませんでした。彼が戻ってくると、弟子達はイエスが突然部屋に現れたという信じがたい体験を話して聞かせます。しかし、トマスは信じようとしません。彼は言います。「先生の手のひらの釘の跡を見ない限り、脇腹の槍の跡をこの指で確かめない限り、そんな荒唐無稽な話は信じない。」

その一週間後、弟子達は同じ部屋に身を潜めていました。今回はトマスも一緒です。そこにイエスが再び現れます。この復活のイエスの厳然とした、否定しようもないリアリティーに、トマスの頑な心は砕かれます。彼はひざまずき、言います。「わたしの主よ、わたしの神よ。」主イエスは彼を優しく諭します。「あなたは見て信じた。見ずに信じる人は幸いだ。」

この不思議なエピソードから私たちは何を読み取ったらいいのでしょうか。

結論を先に言ってしまうと、このエピソードの意味は、復活のイエスとの出会いが弟子達を徹底的に変革したという点にあります。

十字架からイースターまでの間の彼らは、恐怖と混乱と絶望の淵にいました。しかし、確かに何か彼らに起こったのです。おびえきっていた弟子達は福音のメッセージを伝える勇士となり、疑い深かったトマスは、疑いを知らない信仰者と様変わりしたのです。

彼らをそれ程までに変えたもの、それは、イエスは我らと共におられるという、この世界がよっていたかつて否定しようとしても否定することのできない確固とした確信です。

悪霊につかれた者や、身体に障害のある人を立ち上がらせたイエスの癒しと愛、男性と女性が、奴隷と自由人が、ユダヤ人と異邦人が隔ての壁を取り払って共にパンを分かち合う新しい人間の共同体を形成する力が、十字架の後の彼らのなえた心を甦らせ、彼らに自信を与え、彼らに希望を与えたのです。

人間を本当に人間らしくあらしめるもの、人間に本当に生きていてよかったと言わしめるもの、それは、ローマ帝国の権力ではない。祭司長や律法学者の権威でもない。この世の栄華や栄光でもない。そうではなく、神の愛と慈しみ、そして優しさなのだ。その信仰を支えとして今というこの時を生きること、それが本当の生き甲斐なのだ。この否定しようにも否定できない確信が、彼らの魂を揺り動かしたのです。

ここでどうしても解けない問いがあります。弟子達の前に現れたイエスは、ビデオテープに撮っておくことのできる類いの出来事だったのでしょうか。それとも、言葉ではとても表現することのできない神の真実の不思議さと力強さを、当時の人たちの表現能力を精一杯駆使して描いたものなのでしょう。

この問いの答えは、誰にも与えられていません。

しかし、そういうことはどうでも構わないのです。何故でしょう。イエスのトマスへの言葉を思い出してみましょう。「見ずに信じる人は幸いだ。」

つまり、イエス、我らと共にいまし給う。この信仰だけで十分なのです。神はイエスにおいて私たちの悲しみを神の悲しみとして感じ、私たちの苦しみを神の痛みとして背負いながら、私たちと連帯しておられる。私たち一人一人を心にかけていてくださる。この信仰だけで十分なのです。

先週イースターの礼拝を守ったばかりの私たちです。イエスのトマスに向けられた言葉は今私たちに向けられているのだということを心に刻み付けようではありませんか。

「平安があなたがたにあるように。見ずに信じる人は幸いだ。」